
ヤマイノヒトヘ

木野 青澄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヤマイノヒトへ

【Nコード】

N1015BA

【作者名】

木野 青澄

【あらすじ】

僕は不治の病を患う人になった。

現代、誰しもが心に体に病を負っている。

ただそれに気付くかどうかなんだろう。

それは、すぐさま死には至らないが

着実に日常の生活を蝕んでいく。

病に侵されていると知ることとは不幸？

自分が決して治らない病気を

抱えることを知った男の話。

告知

告知は唐突だった。僕が26歳の時。

目の前が暗くなるというよりは他人事にしか聞こえないといった感じ。担当の医師は、医師らしくというか業務的な感じで淡々と説明すると、こう話を締め括った。

「松田さん、大丈夫ですか。わからないこととかあれば聞いて下さいね。」

「はあ…いや、はい…。」

これで終わりといった気配に押されるように、僕は曖昧に返事をする。

「大丈夫ですかだと？どういう意味だ！っていうか、大丈夫ならこんなトコいねえよ！」

とか返していれば、ドラマみたいでよかったかなと思う。まるで他人事のように、そんな妄想が浮かぶ。怒りを表に出そうとするとべらんめえ口調になるのは、いかにも自分にならない自分を演じようとしてるからなんだろうな。やっぱりドラマ的展開なんて僕の人生には起こり得ないんだ。

とにかく僕はこれで不治の病というやつを患う人になった。そして1ヶ月の強制入院が決定した

僕はそのりと立ち上がると、軽く頭を下げ診察室から待合の廊下へ

と出た。さつきより随分空気が重く感じられた。ベンチに座る老婆に死の影が見える気がした。静かにしなさいと母親に諭される小さな女の子が妙に苛立たしく思えた。

1ヶ月の入院。あの頃のことはあまり思い出したくない。というより、思い出せない。

病院なんてのは、治る見込みがあるから平常心でいられるということとを思い知らされた。単調で起伏のない入院生活は、ただただ管理の毎日で人でなく動物になった気がした。

検査で半日ベッドを開けてるうちに隣のジイさんが姿を消し、一輪挿しが、ジイさんのベッド傍に置かれている。

そんな風に、せめて死を間近に感じられれば少しは違うのにな…。不謹慎極まりない妄想が浮かんでしまう生活。

つまり僕の病は、すぐさま死ぬわけではない。それは、いつまでも僕が不治の病のままだということでもある。1ヶ月は驚くほどに長く、予想以上に何も起こらないまま過ぎた。

退院後、会社を辞めることにした。

勤務していたのは、広告代理店でいわゆる中小企業。入社3年で営業所の所長になった。しかし、若くしての出世は、リーダーに向かない自分の資質のなさを知ることになった。

今ではそのことにも感謝している。勘違いは良くないから。だが、世の中的に負け犬なわけで、今は原稿のデザインや文章を担当して

いる。うちの会社が扱うのは求人広告がメインで、クリエイティブなんてものよりもクライアントや営業に対しての聞き分けの良さや従順さが求められる。だから、僕は作業員でしかない。ようするに、後輩が所長に抜擢され、扱いにくい邪魔者の配置転換。左遷？

とはいえ、辞めるのは、別に仕事や仲間が嫌になっただけではない。裏方の仕事にだってそれなりの面白味はある。むしろ技術職なんだから、この先のキャリアアップに活かせるかも知れない。いや、これは左遷を告げた上司の受け売り…。

思えば、ずっと辞めるタイミングを探していた。幸いにか、入院するにあたって、上司や同僚に病気のコトを話さなければならなかった。病氣の話をする

「松田さん、大丈夫なの？」

（それは俺が聞きたい）

「お前が戻って来るの待ってるからな。」

（なんだそりや？戻ってくんなってこと？）

そうして、盆休みを目前にしながら僕は入院。退院すると

「松田さん入院してたんだよね？」

「どうだった？大丈夫？」

（だから、俺にも分からねえってば）

「松田、待ってたぞ！」

（はいはい）

もう十分だった。もうお腹いっぱい。この先もこんな上辺の心配をされながらココにしがみついていたくはない。

それから

とは言え、会社人間であるからには「辞めます」「はい、どうぞ」なんて風にはいかない。確か2ヶ月前には辞意を伝えなきゃいけないだっけ？入社以来、目を通した覚えのない社員規約を探す。

「松田さん、何か探してはるんですか？」

声をかけてきたのは、隣のデスクの大川さんだった。

彼女は同じ制作部に所属こそしているが、異色の存在である。推定40歳以上の独身女性で、かなり仕事ができるらしい。と言うのも、彼女は社員でなく業務委託で働いており、僕のような作業員ではなく、過去には広告賞を受賞したこともある経歴も立派な制作ディレクターなんだそう。うちの会社の創立時から、社長のコネで別の制作会社から引っ張ってきたとのことだった。断定できないのは、僕が他人の制作物に興味がなく、彼女の仕事を目にしようとしないからで、彼女がテキルのは間違いない。当然、僕よりキャリアがあるのだが、彼女はいつも僕をさん付けで呼び、敬語で話す。社員であることに気を遣ってくれているとは別に、どこか距離を置いた雰囲気をする人で、僕はそれが嫌いではない。

「え？ああ先生」

僕は彼女を先生と呼んでいた。

「社員規約をちょっと探してまして…」

「ここの会社のをですか？なんでまた？」

「確認したいことがあるんですよ」

「マネージャーとかに聞かあったら？」

先生は京都出身だ。

「はい。でも、もう少し探してみます」

退院してからというものの、顔を合わす人合わす人から「大丈夫？」
「どうしたんです？」と聞かれるのに嫌気が差していたから久々にオフィスで話をする気がする。

「大川先生、ちょっとご迷惑かけるかもしれませんが。すいません。」

「なんですか、いきなり。松田さん辞めはるんですか？」

「ええ、まあ……」

何とはなしに本当のところを漏らしてしまった。

「ああ、そうですか……」

先生は少し声のトーンを落とし、「大変ですね」とだけ言い残すと、営業担当と打ち合わせの為に席を立った。

「そんなものなのか」

辞める職場であつても、リアクションの薄さにへこんだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1015ba/>

ヤマイノヒトへ

2012年1月3日23時52分発行